**義解**　朝鮮の役、諸將皆夫々に戰功があつた、就中我が國の武勇を輝したるものは、碧蹄泗川の二大役である、碧蹄の大捷は、實に小早川隆景の功である、太閤が隆景を以て、征韓の參謀となせしは、人を知るの明ありと謂ふべしである、果して隆景も亦其任に負くやうなことはなかつた、當時の諸大將か皆隆景には感服して、及ぶべからずとした程である、其功の偉大なる固より論を待たずであるが、其深謀に至りては、天下後世或は悉く知らざる者がある、我が兵の漢城を取りしより、行長は長驅して敵地に深入した、此時隆景は聯絡を保つの策として、多くの寨を築いた、明の援軍が押し寄せてからは、行長も散々敗北した爲めに、秀家より退いて漢城を守るの令を發した、されど隆景は此命令に從はずして云ふに、諸寨を設けたるは、今日の用に供せんが爲めである、如何ぞ之を棄て去るに忍んやと、秀家等は隆景の計策を淺謀としたが、天下の深謀之に存することを知らなんだ、明將李如松破竹の勢を以て我軍に殺到す、諸將の縮退畏避する所であ

る、此時に方り、開城を棄てたらんには、軍氣沮喪して復た收拾すべからざるに至るのだ、隆景の死を決して之を嚴守すべきを云ふ實に天下の深謀ではないか、

而秀家等不足以知之。隆景亦知秀家畏縮。竟不能援。而孤軍無援。不可以戰。遂棄開城而渡臨津。夫既棄開城。又不決戰而守漢城。明兵



乘勢來圍。則海運絕而糧食竭。何以能守。於是隆景力執決戰之議。遂有碧蹄之捷。當是之時。諸軍縮退。士氣沮衂。蓋亦危矣。隆景一奮而挫如松之銳鋒。如松之鋒挫。而明人銳氣沮。隆景之功。可謂大矣雖然。開城則竟不可得而復。非惟

開城不可復。又從而棄漢城。漢城亦竟不可復。然後知隆景之不欲棄開城者。天下之深謀也。其後諸將欲棄順天。加藤嘉明獨執死守之議。而順天得全。泗川之戰。島津忠長勵衆曰。後有大海。前有大敵。退而溺死不如進而戰死。我兵竟





克。此亦隆景之意也

**解説** 而るに秀家等以て之を知るに足らず、隆景も亦秀家畏縮し、竟に援ふ能はざるを知る、而じて孤軍援なく以て戰ふべからず、遂に開城を棄てゝ臨津を渡る、夫れ既に開城を棄つ、又決戰せずして而じて漢城を守る、明兵勢いに乘じ來り圍まば、則ち海運絶へて而じて糧食竭きん、何を以て能く守らん、是に於て隆景力めて決戰の議を執り、遂に碧蹄の捷あり、是の時に當りて諸軍縮退士氣沮衂、蓋し亦危し、隆景一たび奮ひ而じて如松の鋭

鋒を挫く、如松の鋒挫け、而じて明人の氣沮む、隆景の功、大なりと謂ふべし、然りと雖も、開城は則ち竟に得て而じて復すべからず、惟だ開城復すべからざるのみならず、又從て而じて漢城を棄つ、漢城も亦竟に復すべからず、然るに後隆景の開城を棄るを欲せざる者、天下の深謀なるを知るなり、其後諸將順天を棄んと欲す、加藤嘉明獨死守の議を執り、而じて順天全きを得、泗川の戰、島津忠長衆を勵して曰く、後に大海あり、前に大敵あり、退いて而じて溺死するは、進んで而じて戰死するに如かずと、我が兵竟に克つ、此亦隆景の意なり、

解釋　隆景の深謀、終に秀家の知る所とならず、開城も復することか出來す、漢城も亦棄てねばならぬ始末となつた、もし隆景か碧蹄の大捷なかつたならば、我軍の潰敗實に言ふべからる事になるのであつた、隆景一たび奮ひ、李如松の鋭鋒挫け、明軍の士氣沮んだのは愈々益々隆景の大功を認めることが出來るではないか、其後諸將の順天を棄んとしたる場合に、加藤嘉明が抗議を申出でたるも、泗川の戰に、島津忠長か衆士

を鼓舞したるも、皆隆景の餘意と云つてもよい、

加藤　清正

豊臣太閤征韓之役。以清正行長爲先鋒。而行長拔漢城。直至平壤。將長驅入明。清正則逐其王子。深入北境。自當時而言之。長驅入明。是太閤本謀。行長眞不負其任。而

巧詐は拙誠に如かず　全篇の命脈は賀に此兩句にありだ、末段敵人讃嘆の言を引き來り、鬼將軍の眞價を見ばす八將論中、尤も傑出の大文字である、

清正費力於無用之地。可謂拙矣。然而明人來援。行長一敗棄平壤。諸將皆退入漢城。雖有碧蹄一捷。而吾軍之氣亦已衰矣。唯清正新擒王子。擁兵北地。蓄威養銳。如猛獸在山。雖後軍不繼。孤立無援。而其聲威固足以奪明人之氣矣。明

人非不欲力攻漢城。顧清正在北境。安知其不鼓行而西。斷明歸道哉。故明人最畏清正。而宋應昌一時謀將。以爲清正孤立。是可以虛喝取也。乃遣辨士馮仲纓說之。紿以漢城既拔。全軍覆沒。夫孤軍易疑。大國難測。應昌之計。不可謂非奇策也。而清正則忠義奮發。意氣激烈。唯知國威決不可墮。國恩決不可負耳。至於成敗。固非所問。而雄猛自負。初非仰他人之繼援者。故奮正大之辨。以折仲纓。仲纓逃還。而明人益畏清正。即其所以不力攻漢城者。雖由隆景一捷之力。而清正

一言之威。尤爲有助焉。李如松之在開城。軍中傳言。清正將自咸興襲平壤。如松懼還平壤。此廼清正以虛聲懼之耳。夫虛聲一也。在明人則不能以此動清正。清正則能以此懼明人。此由其一言之威先奪其氣也。然則嚮之費力於無用之地者。於是乎一變而爲奇功矣。

讀方　豐太閤征韓の役、清正行長を以て先鋒となす、而して行長漢城を拔ぎ、直ちに平壤に至り、將に長驅して明に入らんとす、清正は則ち其王子を逐ひ、深く北境に入る、當時よりして而して之を言へば、長驅して明に入る、是れ太閤の本謀、行長眞に其任に負かず、而して清正力を無用の地に費す、拙なりと謂ふべし、然り而して明人來り援ひ、行長一敗平壤を棄て、諸將皆退いて漢城

に入る、碧蹄の一捷ありと雖も、而も吾が軍の氣も亦た已に衰ふ、唯だ清正新に王子を擒にし、兵を北境に擁し威を蓄へ鋭を養ふ、猛獸の山にあるが如し、後軍繼ぎず孤立援なしと雖も、而も其聲威固より以て明人の氣を奪ふに足る、明人漢城を力攻するを欲せざるにあらず、顧ふに清正北境にあり、安んぞ其鼓行して而して西し、明の歸道を斷たざるを知らんや、故に明人最も清正を畏る、而して宋應昌は一時の謀將、以爲く清正孤立す、是れ虚喝を以て取るべきなり、乃ち辨士馮仲纓を遣し之に說く



に、紿いて漢城既に拔け、全軍覆沒するを以てす、夫れ孤軍疑ひ易し、大國測り難し、應昌の計、奇策にあらずと謂ふべからざるなり、而るに清正は則ち忠義奮發、意氣激烈唯國威の決して墮すべからず、國恩の決して負くべからざるを知るのみ、成敗に至りては、固より問ふ所にあらず、而して雄猛自ら負む、初より他人の繼援を仰ぐ者にあらず、故に正大の辨を奮ひ、以て仲纓を折く、仲纓逃れ還り、而して明人益清正を畏る、即其漢城を力攻せざる所以の者は、隆景一捷の力によると雖も、

而も清正一言の威、尤も助けありとなす、李如松の開城にある、軍中傳言す、清正將に咸興より平壤を襲んとすと、如松懼れて平壤に還る、此廼ち清正虚聲を以て之を懼すのみ、夫れ虚聲は一なり、明人にあつては則ち此を以て清正を動すこと能はず、清正は則ち能く此を以て明人を懼す、此れ其一言の威先づ其氣を奪ふに由るなり、然らば則ち嚮の力を無用の地に費す者、是に於て乎一變して而して奇功となる、

義解　行長は連勝の餘威を以て殆んど足を明國に入れんとした、實に機敏の行動と云はねばならぬ、されど其行事皆詐謀に出で、誠實を缺いた爲めに、平壤の大敗より彼我の軍中復た行長の存在を認ないやうになつた、之に反して清正の行動は、遲々として其功勞の認むべき者なきが如くなれども、一たび正大の辨を奮ひ明軍の心膽を寒からしめてより、敵軍清正の名を聽くだに慄然として恐れを懷くに至つたのは外ではない、清正は唯だ國威の墮すべからず、國恩の負くべからざることを忘れず、誠心誠意、忠義を以て貫いたからだ

ある、

假令清正與行長齊進。吾恐其中道而有變。安能有此奇功。雖然此出於偶然。而非其所逆料也。則其功果不足尚乎。曰否。古人有言。巧詐不如拙誠。清正以誠。行長以詐。唯詐。故其術雖巧沈惟敬得而欺





之。唯誠。故其所爲似拙。而仲纓不能欺。蓋誠則能自信。自信則剛毅果敢。卓然不惑。詐則不能自信。不能自信則狐疑猶豫。墜敵術中。所以敗也。故征韓之功。余以隆景清正爲第一。而當時徒稱其鷙猛。何哉。蔚山之捷。明人嘆曰。清正才能

勝行長數陪。乃不審堅瑕。先攻清正。安得不敗。是明人深知清正。而公論廼在敵國。嗚呼此其所以爲鬼將軍歟。

**讀方** 假令清正と行長と齊しく進む、吾れ恐る其中道にして而して變あらんことを、安んぞ能く此奇功あらん、然りと雖も、此れ偶然に出づ、而も其逆じめ料る所にあらざるなり、則ち其功果して尙ぶに足らざる乎、曰く否古人言へるあり、巧詐は拙誠に如かずと、清正は誠を以てし、行長は詐を以てす、唯だ詐、故に其術巧なりと雖も、沈惟敬得て而して之を欺く、唯だ誠、故に其爲す所拙に似たり、而して仲纓欺くこと能はず、蓋し誠なれば則ち能く自ら信ず、自ら信ずれば則ち剛毅果敢、卓然として惑はず、詐れば則ち自ら信ずること能はず、自ら信ずること能はざれば則ち狐疑猶豫、敵の術中に墜つ、敗るゝ所以なり、故に征韓の功、余隆景清正を以て第一

となす、而して當時徒らに其鷙猛を稱するは何ぞや、蔚山の捷、明人嘆じて曰く、清正の才能行長に勝る數倍、乃ち堅瑕を審かにせず、先づ清正を攻む、安んぞ敗れざるを得ん、是れ明人深く清正を知る、而も公論廼ち敵國にあり、嗚呼此其鬼將軍たる所以か、

**義解** 行長は巧詐を以て一時を彌縫せんとする、されば人に乘ぜられ易い、是れ其沈惟敬の爲めに、散々馬鹿を見た所以である、清正は誠忠を以て終始を貫んの意氣がある、されば人之に乘ずべき隙間がない、是れ其仲纓の詭辨も寸効を奏しない譯である、征韓諸將の功勞尤も多く尤も大なるは、余竊に隆景清正の二人を以て推すのである、蔚山の捷に、明人清正の才能行長に勝る萬々なりと評した、公論已に敵國にありだ、鬼將軍の眞價も亦た之に存するのである、

**零解** 嘉明は蓋し當時の群雄中海戰には尤も



## 勇固有大小。衝鋒冒刃。破堅陷陣。

加藤嘉明

（經驗の多い人であつた華々敷海戰は到頭見る能はなかつたから此れと云ふ特筆に値すべき者もない、惟だ憾む、嘉明終身の行事、動もすれば、）

非勇之大者也。天下有大勇者。大敵有所不畏。小敵有所不侮。克而不驕。敗而不懼。斯之謂將帥之勇。而將帥之最勇者。如源廷尉新田左中將蓋未嘗不身先士卒。奮戰衝突。以二將之才。指麾天下之精銳。天下固不能當其鋒。又何至以

（戰丈夫の氣魄に乏いの一點である、）

匹夫之勇自奮。然徐而察之。則妙用存焉。未可謂之勇之小者。何則小敵之不足敗者。固不足道。天下苟有大敵。屹然如山嶽之不可撼。沛然如江河之不可禦。氣勢足以壓我。謀略足以乘我。當是之時不有先倡者。孰能馳驟於萬死之地

而不懼。是故抗百萬者氣必先呑百萬。捍天下者氣必先呑天下。然後勝敗不足以動其心。死生不足以奪其氣。此其所以能奮一身而倡三軍。自非天下之大勇。其孰能與於此哉。而其能奮而不懼。亦有術焉。彼必有爪牙之士。莫非天下之驍雄。其相得如膠漆。相從如影響。故身先士卒。而左右從衛。莫非天下之驍雄。是以所向摧破。天下莫不震懼。斯之謂妙用。

**讀方** 勇固より大小あり、鋒を衝き刃を冒し、堅を破り陣を陷る、勇の大なる者にあらざるなり、天下に大勇なる者あり、大敵畏れざる所あり、小敵侮らざる所あり、

克て而して驕らず、敗れて而して懼れず、斯れ之を將帥の勇と謂ふ、而して將帥の最も勇なる者、源廷尉新田左中將の如き、蓋し未だ嘗て身士卒に先ち、奮戰衝突せずんばあらず、二將の才を以て、天下の精鋭を指麾す、天下固より其鋒に當るあたはず、又何ぞ匹夫の勇を以て自ら奮ふに至らん、然れども、徐にして而して之を察せば、則ち妙用存す、未だ之を勇の小なる者と謂ふべからず、何となれば則ち小敵の敗るに足らざる者、固より道ふに足らず、天下苟も大敵ある、屹然として山嶽の撼すべからざるが如く、沛然として江河の禦ぐべからざるが如し氣勢以て我を壓するに足り、謀略以て我に乘ずるに足る是の時に當り、先倡者あらざれば、孰か能く萬死の地に馳驟して而して懼れざらん、是故に百萬に抗する者は氣必ず先づ百萬を呑む、天下を防ぐ者は氣必ず先づ天下を呑む、然る後勝敗以て其心を動すに足らず、死生以て其氣を奪ふに足らず、此其能く一身を奮ふて、而して三軍を唱ふ所以、天下の大勇にあらざるよりは、其孰か能く此に與せんや、而して其能く奮ふて而して懼れざる、

亦術あり、彼れ必ず爪牙の士あり、天下の驍雄にあらざるはなし、其相得る膠漆の如く、相從ふ影響の如し、故に身士卒に先ちて、而して左右從ひ衛る、天下の驍雄にあらざるはなし、是を以て向ふ所摧破し、天下震懼せざるはなし、斯れ之を妙用と謂ふ、

**義解**　大敵畏れず、小敵侮らず、克て驕らず、敗れて懼れず、身常に士卒に先ち、奮戰衝突、勝敗以て其心を動すに足らず、死生以て其氣を奪ふに足らず、斯れを之れ天下の大勇と云ふのである、身士卒に先つが如きは匹夫の勇に似たりと雖も、大敵殺到、其氣勢我を壓するの場合に、先唱がないならば、恐らく三軍の士氣沮喪して、復た用を爲ぬである、されど身士卒に先つにも、何等の恃む所がなくては、迚も奇功を奏することは出來ない、爪牙の士あり、從衛の卒あり、其相得る膠漆の如く、其相從ふ影響の如くあつてこそ、始めて此快擧に出ることが出來るのである、斯れか所謂妙用と云ふものである、

朝鮮唐島之戰。嘉明身先士卒。奪敵艦數艦。當時將士或曰何必自獲船而後爲功。此說也余尤不服。夫水戰中國之所希有也。外征之師。自神后以降。蓋未嘗絕。其最著者如狹手彥之征高麗。比羅夫之伐肅愼。其功偉矣。然未聞水戰。而瀕海之役。僅有女眞之賊。元寇之變耳。水戰之寥々無聞亦宜矣。況乎海內群雄之龍戰虎爭。皆在陸而不在水。當時諸將之所講究。亦在陸而不在水。故明人論我兵曰。巧於陸戰。拙於水戰。是外國之畏我。亦在陸不而在水。故李舜臣之

禦我常於水而不於陸。以我諸將之才。何所不能。諸軍之銳。何所不破。然中國之不習於水戰如此。而彼方出於我所短。其氣盛矣。其鋒銳矣。則嘉明之所以身先士卒者。蓋所以奪敵氣而折其鋒。庸詎知當日之捷不由嘉明之首倡哉。而



其能爲此者。得非有爪牙之士以相捍衛耶。兵家妙用。嘉明蓋得之。當時所謂觀芳野之花。不若觀嘉明之戰者。亦可以想見其雄壯矣。如曰嘉明血氣之勇。故能爲此。則大不然。諸將之議棄順天也。嘉明奮然不從。欲以孤壘捍大敵。其言

凛々可以立懦。不得不謂之大勇。則水戰之功。亦安得謂之小勇哉。

**讀方** 朝鮮唐島の戰に、嘉明身士卒に先ち、敵艦數艘を奪ふ、當時の將士或は曰く、何ぞ必ずしも自ら船を獲て而して後功とせんと、此說や余尤も服せず、夫れ水戰は中國の有ること希なる所なり、外征の師、神后より以降、蓋し未だ嘗て絕へず、其最も著るゝ者は、狹手彥の高麗を征し、比羅夫の肅愼を伐つが如き、其功偉なり、



然れども未だ水戰を聞ず、而して瀕海の役、僅に女眞の賊、元寇の變あるのみ、水戰の寥々聞ゆるなきも亦宜なり、況んや海內群雄の龍戰虎爭、皆陸にありて而して水にあらず、當時諸將の講究する所、亦陸にあつて而して水にあらず、故に明人我兵を論じて曰く、陸戰に巧にして、水戰に拙しと、是れ外國の我を畏るゝ、亦陸にあつて而して水にあらず、故に李舜臣の我を禦ぐ、常に水にあつて而して陸に於てせず、我が諸將の才を以て、何ぞ能くざる所あらん、諸軍の銳、何ぞ破れざる所あらん、

然れども中國の水戰に習はざる此の如し、而して彼方我が短なる所に出づ、其氣盛、其鋒鋭、則ち嘉明の身士卒に先つ所以の者、蓋し敵の氣を奪ふて而して其鋒を折く所以なり、庸詎當日の捷嘉明の首倡に由らざるを知んや而して其能く是を爲す者は、爪牙の士あり以て相捍衛するにあらざるを得んや、兵家の妙用、嘉明蓋し之を得たり、當時の所謂芳野の花を觀る、嘉明の戰を觀るに若かざる者、亦以て其雄壯を想見すべし、如し嘉明血氣の勇、故に能く此を爲すと曰ふは、則ち大に然らず、諸將の順天を棄るを議するや、嘉明奮然從はず、孤壘を以て大敵を防んと欲す、其言凛々、以て懦を立つべし、之を大勇と謂はざるを得ず、則ち水戰の功、亦安んぞ、之を小勇と謂ふを得んや、

**義解**　神后の外征以來、狹手彦の高麗を征し、比羅夫の肅愼を伐ちたる、若くは女眞の賊元寇の變、多少の海戰を見ざる譯ではないが、海軍が陸軍の進歩に伴はざりし事は、固より論を待たずである、故に征韓の折にも、陸戰では殆んど連戰連勝の奇功を奏したが、

海戰の方はいつも敗戰勝であつた、早くも敵は我の弱點を見出して、我を海に要するやうになつた、斯る場合に、之が將たる者が、身士卒に先んじ、士氣を鼓舞するでなかつたならば、軍氣沮喪、復た用ゆべからざるに至るのである、嘉明は茲に見る所があつて、いつも士卒に先んじて奇功を奏したのである、之を匹夫の勇などゝ言ふは、未だ此間の妙用を知らない門外漢の空論である、諸將の順天を棄んとした時も、嘉明が奮然此說を排斥して、懦夫を立たしめた事に徵しても



**異名** 如水の二字に就いて論を立たのである、而じて波瀾開闔の妙、臆料揣摩の巧盡し蘇

嘉明は決して小勇の人でなく、大勇の人であつたと云ふ事は、明白である、

黑田如水

英雄相遭。果能皦然相信。坦然相待。豈非天下之樂事耶。但其畧甚偉則猜釁生焉。其功甚高則讒間入焉。於是嚮之相待而爲功者。今

長公を學べる者、八將論中山色の文字である、

乃變而爲仇。嚮之相得而爲驩者。今乃變而爲怒。此古今英雄之所悲也。吾觀源右將之於廷尉。方其始相見之日則喜曰。吾之見卿。猶見故將軍也。是其親愛之情。乃比之父。而他日驅滅平氏。令右將濟大業者。廷尉也。即其親愛之情。宜陪蓰於他日。而一梶原讒之則忿然見於聲色。嚮之比之父者。不啻寇讐。繇此觀之。功名之際。雖兄弟猶且不能相保。況其他乎。豊太閤之用人。固已卓越古今。然至於猜忌。猶所不免。故竹中欲逃於浮屠。如水則傳國於子。一時英豪固有

窺其肺肝者矣若夫推赤心於人腹中。而無一毫猜忌者。此東照公之所以邁越萬古。而群雄之所以懷服不忍離也。則天下之歸公。猶百川之歸海。豈人力哉。而世或謂如水有爭天下之意。而不屑爲。是無足辨者。然而世所傳如水之言



則未必妄。而如水之意。吾推其跡而知之。夫如水以絕異之姿。爲太閤所忌。去危疑之地。避母望之禍。豈其本志哉。吾觀其所以自命。蓋寓意於水焉。夫狂濤駕空。怒聲撼地。蛟蜃隱顯。船舶糜碎。此水之可畏者。而如水之以智畧見忌。蓋有

似於此。風濤歛威。輕塵不飛。演迤汪洋。萬里一碧。此水之可愛者。而如水蓋以此自處焉。然其深而不測者。固自若也。如水乃輕世肆志。放言不顧。而太閤知其無意於世。此亦有取於水之隨物賦形。與山石曲折者也。



**讀方** 英雄相遭ひ、果して能く皦然相信じ、坦然相待つ豈に天下の樂事にあらずや、但だ其略甚だ偉なれば則ち猜釁生す、其功甚だ高ければ則ち讒間入る、是に於て嚮の相待て而して功を爲す者、今は乃ち變じて而して仇となる、嚮の相得て而して驩をなす者、今は乃ち變じて而して怒をなす、此古今英雄の悲む所なり、吾源右將の廷尉に於けるを觀るに、其始めて相見るの日に方り則ち喜んで曰く、吾の卿を見る、猶故將軍を見るが如しと、是れ其親愛の情、乃ち之を父に比す、而るに他日平氏を

驅滅し、右將をして大業を濟しむる者は廷尉なり、即ち其親愛の情、宜しく他日に陪從ずべし、而るに一の梶原之を讒す、則ち忿然聲色に見れ、嚮の之を父に比する者た、啻に寇讐のみならず、繇此之を觀れば、功名の際、兄弟と雖も、猶且つ相保つこと能はず、況んや其他をや、豊太閤の人を用ゆる、固より已に古今に卓越す、然れども猜忌に至りては、猶免れざる所、故に竹中は浮屠に逃んと欲し、如水は則ち國を子に傳ふ、一時の英豪固より其肺肝を窺ふ者あり、若し夫れ赤心を人の腹中に推して、



而して一毫の猜忌なき者は、此れ東照公の萬古に邁越する所以、而して群雄の懷服離るゝに忍びざる所以なり、則ち天下の公に歸する、猶百川の海に歸するが如し、豊に人力ならんや、而るに世或は謂ふ如水天下を爭ふの意あり、而も爲すを屑とせずと、是れ辨ずるに足る者なし然り而して世に傳ふる所の如水の言則ち未だ必ずしも妄ならず、而して如水の意、吾其跡を推して而して之を知る、夫れ如水絶異の姿を以て、太閤の忌む所となり、危疑の地を去り、毋望の禍を避く、豊に其本志ならんや、

吾れ其自ら命ずる所以を觀るに、蓋し意を水に寓す、夫れ狂濤空に駕し、怒聲地を撼し、蛟蜃隱顯、船舶糜碎す此水の畏るべき者、而して如水の智略を以て忌るゝ、蓋し此に似たるあり、風濤威を歛め、輕塵飛ばず、演迤汪洋、萬里一碧、此水の愛すべき者、而して如水蓋し此を以て自ら處る、然れども其深くして而して測れざる者、固より自若たり、如水乃ち世を輕んじ志を肆にし放言顧みず、而して太閤其世に意なきを知る、此亦水の物に隨ひ形に賦し、山石と曲折するに取る者なり、



**義解** 功名の際は、兄弟とても相保つことは難い、まして他人にあつては猶更の事である、豊太閤の如き、人を用ゆるに妙を得て居つた事は、古今に卓越して居る、されど猜忌の念に至りては、猶且つ免る事が出來ない、竹中の如きも心竊に不滿に思ふて坊主にならんとした位だ、如水に至りては、竹中に勝る層一層高き人物であつたので、頗る太閤の忌む所となつた、慧眼なる如水は之を看破して、國を我子長政に傳へて、全然世に意なきを示し、巧に危疑の地を去り、母望の禍

を避けた、こは畢竟水の物に隨つて曲折自在、流れて止まざるの所より悟入したものであらふ、

吾聞東照公之黜石田。如水預其議焉。則公之於如水。諮以機謀密畫而不疑。夫以如水之智。遇公之明。其必皦然相信。而如水平生之志意。吾知其必爲公輸寫矣。即其



所以蕩平西海者。無非所以竭忠於公。而庸人猶過揣謬度如水之心。夫庸人之疑不破則讒間或得乘之。如水固不得不大聲疾呼以辨之。故其言奔放雄肆。翕張捭闔。孩視群雄。塊視宇內。而無所顧。使如水果有意於爭天下耶。何以發

此言唯其放言不顧乃所以破庸人之疑而杜讒間之口。嗚呼如水可謂知所畏矣。

**讀方**　吾れ聞く東照公の石田を黜く、如水其議に預ると則ち公の如水に於ける、諮ふに機謀密畫を以てし而して疑はず、夫れ如水の智を以て、公の明に遇ふ、其れ必ず皦然相信ず、而して如水平生の志意、吾其必ず公の爲に輸寫せるを知る、即ち其西海を蕩平する所以の者、忠を公に竭す所以にあらざるはなし、而るに庸人猶如水の心を過揣謬度す、夫れ庸人の疑ひ破らざれば則ち讒間或は之に乘ずるを得、如水固より大聲疾呼以て之を辨せざるを得ず、故に其言奔放雄肆、翕張捭闔、群雄を孩視し、宇内を塊視し、而して顧る所なし、如水をして果して天下を爭ふに意あらしめんか、何を以てか此言を發せん、唯だ其れ放言して顧みず、乃ち庸人の疑を破りて而して讒間の口を杜く所以、嗚呼如水畏るゝ所を知れりと謂ふべし、

**義解**　如水は太閤に忌れたので、十二分の技倆を發揮することが出來なかつた、處が、東照公の明識に遇ひ公の爲めに熱誠を寫いて、西海を蕩平して、公をして西顧の憂なからしめた、されど兎角世の凡庸の輩は、英雄の心事を誤認するものである、若し之を不問に付せん乎、忽ち讒間は之に乘じて來る、そこで如水は庸人の疑惑を破る爲めに、故らに大言放語して、讒者の口を杜いだのである、如水がもし天下を爭ふの念慮のあつたとすれば、其れこそ時勢の如何を辨せざる、所

**義解**　太閤托孤を論ずる、主頗る模糊其立論行文、皆皮膜一層を隔るを免れざる者に似

謂御先眞闇の愚人と云はねばならぬ、此等の流說は如水の心事を解せざる、庸人猜疑の愚說たるは云ふまでもない、

前田利家

大哉豐太閤之用人也。天下之才。莫不搜羅。尺寸之功。莫不甄錄。瑣屑之技。莫不獎擢。微賤之勇。莫不

たり、是れ豐田天功の評である、如何にも論旨支離滅裂、他の文と相似ざるは何の故ぞや、猿も木から落ると云ふのが、斯んな事かしら、暫く疑ひを存して置く

激賞。以レ此誅レ賊。以レ此汛二掃海內一。以レ此鞭二撻朝鮮明國一。所レ向莫レ不レ如レ意可謂偉矣。然而至二於託レ孤一事一。則太閤蓋不レ能レ無レ憂。託レ孤天下之大任也。君能知二其人一而託レ之。臣能當二其任一而不レ愧者。近古僅推二足利義詮細川賴之一耳。太閤之時。非レ無レ人也。但天命人心已有レ所レ歸。太閤無二奈レ之何一耳。雖レ然。在二太閤之宿將一則不レ得レ不レ任二其責一。而當時宿將。莫レ如二利家一。太閤必有レ望二於利家一矣。吾觀二利家臨レ死之言一。蓋慨然當二天下之大任一而不レ撓。其意不レ爲レ不レ壯。然徒爲二此言一。於レ事無レ益。將何以報二

太閤乎。吾聞利家嘗招加藤清正淺野幸長。語以論語託孤寄命之章。此必有以也。夫大厦之傾。非一木之所能支。然在臣子則必竭力然後已。何暇顧其力之不足邪。彼利家者。非不知豐臣氏之必衰而至於不可救也。又非不知天命人心之所歸。決非他人之所能抗衡也。然欲爲太閤竭力而不負其意。則不得不擇託孤之人。夫輝元之庸才。不足以託孤。景勝之驍猾權詐。不可以託孤。三成等之詭譎傾險。尤不可以孤託。求其人而不得。得誠慤有餘而權數不足者。亦可

以報二太閤一矣。此其所三以示二微意於清正幸長一歟。

**讀方** 大なる哉豊太閤の人を用ゆるや、天下の才、捜羅せざるはなく、尺寸の功、甄録せざるはなく、瑣屑の技奬擢せざるはなく、微賤の勇、激賞せざるはなし、此を以て賊を誅し、此を以て海内を汛掃し、此を以て朝鮮明國を鞭撻す、向ふ所意の如くならざるはなし、偉なりと謂ふべし、然り而じて孤を託するの一事に至りては、則ち太閤蓋し憂ひなきこと能はず、孤を託するは天下の大任なり、君能く其人を知りて而じて之を託し、臣能く其任に當りて而じて愧ざる者、近古僅に足利義詮細川頼之を推すのみ、太閤の時、人なきにあらざるなり、但だ天命人心已に歸する所あり、太閤之を奈何ともするなきのみ、然りと雖も、太閤の宿將にあつては則ち其責に任ぜざるを得ず、而して當時の宿將、利家に如くはなし、太閤必ず利家に望むあり、吾れ利家死に臨むの言を觀るに蓋し慨然として天下の大任に當りて而して撓まず、其意

壯ならずとせず、然れども徒に此言を爲す、事に於て益なし、將た何を以て太閤に報せんや、吾れ聞く利家嘗て加藤清正淺野幸長を招き、語るに論語孤を託し命を寄するの章を以てす、此れ必ず以あるなり、夫れ大厦の傾く一木の能く支ふる所にあらず、然れども臣子にあつては則ち必ず力を竭して然る後已む、何ぞ其力の足らざるを顧るに暇あらんや、彼利家は、豊臣氏の必ず衰へて而して救ふべからざるに至るを知らざるにあらず、又天人命心の歸する所、決して他人の能く抗衡する所にあらざる



なり、然れども太閤の爲めに力を竭して而して其意に負かざらんと欲す、則ち孤を託するの人を擇ばざるを得ず夫れ輝光の庸才、以て孤を託するに足らず、景勝の驍猾權詐、以て孤を託すべからず、三成等の詭譎傾險、尤も以て孤を託すべからず、其人を求めて而して得ず、誠慤餘りありて而して權數足らざる者を得、亦以て太閤に報ずべし、此其微意を清正幸長に示す所以か、

**義解** 豊太閤は世の所謂總花政略を弄するの英雄であつた、所有楷級の人間を網羅して、巧に之を利用した

ので、割合に早く天下を取つたのである、晩年大分燒が廻つてから、孤を託するの一條には、餘程凡化し俗子したのである、輝元の庸才、景勝の權詐、三成の詭譎、いづれも孤を託すべき人でない、そこで誠慤餘りありて權數足らざる利家に、此大任を托した、不幸にして早く死んだのは、豊臣氏のよく〳〵傾覆に向つた前兆である、利家が死に臨み、微意を清正幸長の兩人に示したのを見ても、彼が如何に誠慤の士なりしかは判る、



嗚呼自利家之死。而天下之權日益去。將士之心日益離。大阪之勢日益孤。彼二人者何能爲。況二人亦皆勇將。未嘗知託孤之義。將何以當天下之大任。然清正晚年慨然誦利家之言。以陷不義爲戒。則利家之所以諭二人者。蓋出於至

誠而二人亦感奮不能忘可以見矣二人奮區區之力擁護秀賴天下固知其爲末而秀賴不爲無所倚賴則未可謂大阪無人而利家付託之意亦爲不虛然則太閤用人之美於是可見而東照公亦稱清正等之忠於所事以美太閤之知人豈虛也哉

讀方　嗚呼利家の死してより、而して天下の權日に益々去り、將士の心日に益々離れ、大坂の勢ひ日に益々孤なり、彼の二人の者何ぞ能く爲ん、況んや二人も亦皆勇將未だ嘗て孤を託するの義を知らず、將た何を以て天下の大任に當らん、然れども清正の晩年慨然として利家の言を誦し、不義に陷るを以て戒めとなす、則ち利家の二人を諭す所以の者、蓋し至誠に出つ、而して二人も亦感奮

忘るゝこと能はざる以て見つべく、二人區々の力を奮ふ秀頼を擁護す、天下固より其末たるを知る、而も秀頼依頼する所なしとせず、則ち未だ大坂人なしと謂ふべからず、而して利家付託の意、亦虚しからずとす、然らば則ち太閤人を用ゆるの美是に於て見つべし、而して東照公亦清正等の事ふる所に忠なるを稱し、以て太閤の人を知るを美む、豈に虚ならんや、

**義解**　利家の死してより、天下の權日に豐臣氏を去り大阪は殆んど孤立の有樣となつた、清正初め託孤の義を知らざりしが、晩年に至り、利家の言に感奮し、區々の誠忠を竭し、將に傾覆せんとするの天下を、譬へ暫の間にても支持したのは、幸長清正等の力であると同時に、豐公が人を知るの明あつた事も愈々益々明白である、東照公が清正等の誠忠を稱して、更らに豐公が、人を用ゆるの妙を讃美せられたと云ふ事は、決して虚構の事ではない

伊達政宗

**眉評** 成敗により、粗なり妄なりと云ふ者は、未だ英雄の心事を談ずるの資格はない、政宗の叛服常なきの行動は、如何にも粗妄の嫌ひなきにあらざれども、

堅忍而不拔。百折而不撓者。惟英雄之志爲然。方其志之未得也。至苦有所不辞。至難有所不避。人見其不辞至苦則謂之粗。見其不避至難則謂之妄。若不幸而不得志。則終於粗與妄耳。此英雄之所以不可以成敗論也。太閤之





彼か滿身の覇氣此擧に出づるは寧ろ當然の事である、試に當時の權謀をして政宗を地を易へしめば、又必ず政宗の爲す所を爲すや必せりである、晩年に至り、

伐小田原。政宗從陸奥來謁。太閤召見遣之。人以爲放虎於野。太閤獨謂。在野之虎。吾能縛之。其御政宗已有成算。而陸奥平矣。然慮政宗之有時而咆哮四出。故封氏鄉於會津以備之。而政宗之志未嘗折也。及太閤凱旋。乃誘葛西大崎

天命人心の歸着する所を見ては、幡然志を改め、聲樂を國中に設け、巧に危疑の地を去り毋望の禍を避けたるは知者にあらずんば能はざる所である誰か彼を目して粗妄と

之民擧兵。欲夾擊氏鄉。此殆似不能忍者。何者。氏鄉海內英將。太閤所憚。豈烏合之所能抗。而太閤之明亦豈區々智術之所能蔽欺哉。然則氏鄉固未易克。縱能克之。太閤決無可欺之理。則當時勇將猛士攢聚如林豈政宗之所能當。而海內之兵。亦豈一國之所能禦哉。然則政宗果似不能忍者。雖然。政宗而非英雄則可。若英雄也則安有不能忍而妄擧事者。夫伊達氏之於陸奥。盤據累世。及至政宗。幷吞隣境。非盡吞東陲諸國則其志未已也。而太閤奪之會津仙道。政

宗固不能無怨。且夫以氏鄉之才。假以數年。撫輯人民。鎮服境內。則政宗之地。將何時而復。此其所以急於舉事。而其所以禦太閤者。亦有術焉。彼果克氏鄉。乘勢復會津。然後宣言曰。嚮吾若抗太閤。則曲在我。我不敢抗。而彼奪我地。曲在彼。我寧捍天下而死。此所不避至難者。而其勝敗則委之於天。英雄果決固如此。而後世或咎其妄。非知英雄者也。

讀方　堅忍にして而して拔けず、百折して而して撓まざる者は、惟だ英雄の志を然りと爲す、其志の未だ得ざるに方りてや、至苦も辭せざる所あり、至難も避けざる所

あり、人其至苦を辞せざるを見て則ち之を粗と謂ふ、其至難を避けざるを見て則ち之を妄と謂ふ、若し不幸にして志を得ざれば、則ち粗と妄とに終るのみ、此れ英雄の成敗を以て論ずべからざる所以なり、太閤の小田原を伐つ、政宗陸奥より來謁す、太閤召し見て之を遣る、人以爲く虎を野に放つと、太閤獨謂ふ、野にあるの虎、吾能く之を縛す、其政宗を御する已に成算あり、而して陸奥平かなり、然れども政宗の時あつて而して咆哮四出するを慮る、故に氏郷を會津に封じ以て之に備ふ、而るに政宗の志未だ嘗て折けざるなり、太閤凱旋するに及び、乃ち葛西大崎の民を誘ひ兵を擧げ、氏郷を夾擊せんと欲す此れ殆んど忍ぶこと能はざる者に似たり、何となれば、氏郷は海内の英將、太閤の憚る所、豈に烏合の能く抗する所ならんや、而して太閤の明、亦豈に區々たる智術の能く蔽欺する所ならんや、然らば則ち氏郷固より未だ克ち易からず、縱ひ能く之に克つも、太閤決して欺くべきの理なし、則ち當時の勇將猛士攢聚林の如し、豈に政宗の能く當る所ならんや、而して海内の兵、亦豈に一國の

能く禦く所ならんや、然らば則ち政宗果して忍ぶ能はざる者に似たり、然りと雖も、政宗にして而して英雄にあらざれば則ち可、若し英雄ならは則ち安んぞ忍ぶ能はずして而して安に事を擧ぐ者あらんや、夫れ伊達氏の陸奥に於ける、艦據累世、政宗に至るに及んで、隣境を並呑す盡く東陲諸國を呑むにあらざれば則ち其志未だ已まざるなり、而るに太閤之が會津仙道を奪ふ、政宗固より怨みなきこと能はず、且つ夫れ氏郷の才を以て、假すに數年を以てし、人民を撫輯し、境内を鎮服せば、則ち政宗の地、將た何の時にして而して復せん、此其事を擧ぐるに急なる所以にして、而して其太閤を禦ぐ所以の者、復術あり、彼れ果して氏郷に克ち、勢に乘じて會津を復し然る後ち宣言して曰ん、先に吾若し太閤に抗せば則曲我にあり、我敢て抗せず、而して彼れ我地を奪ふ、曲彼にあり、我寧ろ天下を捍て而して死せんと、此れ所謂至難を避けざる者、而も其勝敗は則ち之を天に委す、英雄の果決固より此の如し、而るに後世或は其安を咎む、英雄を知る者にあらざるなり、

**義解**　至苦も辭せず、至難も避けざるは、英雄にして始めて之を能くすることが出來る、而るに庸人は其至苦を辭せず、至難を避けざるを見て、粗と言ひ妄と評するは、單に成敗の後に就ての事にて、決して英雄の心事を了解したるものではない、政宗が太閤の凱旋を待ちて、兵を擧げたのは、甚だ時勢を解せないやうではあるが、多年の力にて並呑したる會津仙道の地を奪はれて見れば、奮然起ちて反抗を試みたのは、實に無理ならぬ事である、此が所謂至難を避けずして、天下に抗したる所以である、後世の論者か之を稱して妄と云ふのは、未だ深く英雄の心事を知れる者とは云へない、

雖然。氏鄉終不可得而克。則不得不屈意辱身以解太閤之怒。故太閤召之則速往而不懼。命之討賊則奮戰而不辭。徙之醜地則屈首

而不怒。征韓之役則濟海而不顧英雄之能忍如此。而其志亦未嘗折也。故庚子之亂則謀復會津。東照公戒之而不顧。其兵摧衂而不畏。及亂平。賞不及而不怒。後世或笑其粗。非知英雄者也。吾聞政宗晚年設伎樂於國。公聞而大喜。豈政宗之志至是而折。公亦以是而喜之歟。英雄之意。惟英雄知之。當時加藤清正聞而歎美之。吾於清正之言知政宗之意矣。蓋政宗深服公之偉略。所以留意伎樂以先天下。天下定而民未安。英雄樂而天下安。政宗之用心於天下如此

而公知之。清正知之。不然。英雄豈有不得志於天下而留意於聲伎者耶。政宗之志雖未伸乎。公之偉略足以服之。又安得不歛其英氣以爲天下英雄之首倡乎哉。

**讀方** 然りと雖も、氏鄉終に得て而して克つべからず、則ち意を屈し身を辱しめ以て太閤の怒を解ざるを得ず、故に太閤之を召せば則ち速に往いて而して懼れず、に命じて賊を討たしむれば則ち奮戰して而して辞せず、之を醜地に徙せは則ち首を屈して而して怒らず、征韓の役には則ち海を渡りて而して顧みず、英雄の能く忍ぶ此の如し、而も其志亦未だ嘗て折けざるなり、故に庚子の亂には則ち會津を復せんことを謀る、東照公之を戒めて而して顧みず、其兵摧衂して而して畏れず、亂平くに及んで、賞及ばずして而して怒らず、後世或は其粗を笑ふ、英雄を知る者にあらざるなり、吾聞く政宗晩年伎樂

を國に設く、公聞いて而して大に喜ぶと、豈に政宗の、是に至りて而して折け、公も亦是を以て之を喜ぶか、蓋雄の志惟だ、英雄之を知る、當時加藤清正聞いて而して之を歎美すと、吾清正の言に於て政宗の意を知る、蓋政宗深く公の偉略に服す、意を伎樂に留め以て天下にんづる所以、天下定りて而して民未だ安んぜず英雄樂で而して天下安し、政宗の心を天下に用ゆる此の如し而して公之を知り、清正之を知る、然らざれば、英雄に志を天下に得ずして而して意を聲伎に留むる者あ



や、政宗の志未だ伸びずと雖も、公の偉略以て之を るに足る、又安んぞ其鋭氣を歛めて以て天下英雄を爲すにあらざるを得んや、

**義解**　己に氏鄕に克つことが出來ない、此上は意し、身を辱しめても、太閤の怒を解なくてはならぬ左れば太閤の召しとあれば直ちに拜謁して、少も懼れなんだ、其後は唯だ命之れ從ふて屈辱に甘んじた、後世より其計謀の粗漫を笑ふが、畢竟、政宗の秘密を知らないからである、其晩年に至り、伎樂を國中に設、

たのは、愈天命の德川氏に歸するを見て、此擧に出てたのである、所謂明哲身を保つの點に於て遺憾なしと云ふべしと、

豐田天功曰延光好讀蘇文。評論古今人物。故平生之文。議論居多。先君子好叙事而好議論。嘗涉獵近世野史。抄錄英雄事實數十卷。蓋欲著一書而不果。延光請而作論若干篇。此編是也。近稍悔少作之欲學叙事。而先君子既易簀矣。即平生譏之文。皆删而不存。獨留此編者。以取材於君子抄錄也。

藤田東湖曰織豐二家及清正三論。實無二文字。非僕訣言也。



新譯

# 六雄八將論

大尾

明治四十三年十二月三十日印刷
明治四十四年一月十日發行

定價金參拾五錢

著作者　阪井末雄

發行者　東京市京橋區南紺屋町十八番地　小川寅松

印刷者　東京市牛込區水道町二十五番地　福山福太郎

發行所　東京市京橋區南紺屋町十八番地　振替口座四〇貳貳番　尙榮堂

261
836